
転生女の独白

晴耕雨読。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生女の独白

【Nコード】

N4246Z

【作者名】

晴耕雨読。

【あらすじ】

「私」は二十六歳。女。現在は独り暮らしで、OLをやっている。……はずである。今、断言できないのが悲しい。なぜなら目を開ければ見知らぬ部屋。しかもどうやら、この身体は「私」のではない。――？

女、赤ん坊になる

なにがなんだか。

目が覚めれば、見覚えのない部屋。

いったいどうなっているんだ。

起き上がろうとすれば、立ち上がらない身体。

助走をつけようともがけば、視界に入る小さな手。

いったいどんなっているんだ。こりゃあ。

考えようとすれば、シャツアウトしようとする頭。

……ああ、眠い……。

今頭をしめるのは、もう頭を悩ます疑問じゃなく。

このまま身をまかせれば心地よくなれるという本能だけだった。

ほら。いまも睡魔という美しい女性がこちらへ手招きしている。

ああ、向こうは楽園だ。

どうしてあらがう必要などあるうか。いや、ありはしない。

そして……。

私は誘惑に負けた。

つむ。どうやら私は赤子らしい。いや、訂正。赤子である。(ち

なみに女の子)

それに行き着くまで一年かかった。

いや、どれだけ鈍いんだとか言うなよ。

だって、先ほどのことを何回も繰り返していたし。

睡眠にはあらがえません。(きっぱり)

そんな中、起きている少ない時間で考えた結果である。

まあ、現にまた眠たくなる理由も納得できるしな。

……私と同年代くらいである二十代の女性にそう軽々持ち上げてもらえないし。

赤子は恐怖がいつぱいだ。

離れてみれば日常でよく使っていた物だと分かるが、近づいて見るとほとんどの物が何が何だが分からなかった。

さすがに足蹴されそうになったときは、焦った。

目線の高さが変わるだけで、こつも違うとは……。

最初の頃は、巨人の国に迷い込んだのかと真剣になやんだものだが、私が赤子なら納得。

それにしても……

「由紀ちゃん。ご飯よー」

……うむ。授乳のときはあれだな。恥ずかしい。

しかし、欲求というのは逆らえないものなのだとつくづく感じる。

一口含めば、恥ずかしさなんてどこに行ってしまったのか、腹を満たすのに必死になってしまった。

……食後の我に返ったときの心情といったら。……なにもい
うまい。

今はもう哺乳瓶だが、はやく離乳食になりたいものだ……。

今日は私の誕生日。
今年で二歳になる。

二回目の誕生日で気づいたのだが、わたしは12月の冬生まれだ。

冬 雪 ゆき 由紀 ゆき

……まさかな。

両親はにこにここと、ろうそくの火を消そうをする私に注目。

視線がいたいわ！

父の手には、ばつちりカメラ装備。いまかいまかとシャッターチャンスをつかっている。

母は私の後ろから軽く抱きしめるようにして、私の肩から顔をのぞかせる。

……うん。主役わたしよりも、ずっとずっと嬉しそうだな。

正直言つて、お人よしで人からだまされそうな父と母。

まだ二年の付き合いだが、近々それに「単純そう」「もプラスされるだろう。」

だが。

この人たちと家族なもの、そう悪くない。

二歳になってからというものの、舌がだんだんまわってきた。

こっそり鍛錬していたおかげだろうか。

といつても、とうてい心の中でいっているのがそのまま言えるほど、流暢になんてしゃべれない。

一歳の頃から、母が読み聞かせが好きなのかよく本を読んでくれた。

車のイラストがあったら「これはぶーぶだよ」なんて丁寧に説明してくれながら。

だからつい、「ぶーぶは？」なんて質問されたからとっさに車を

指した。イラストのではない。本物のだ。

やば。まず。ふつう一歳児はそこまで理解しないか？

なんて思ってた時にはすでに遅し。

「きゃー！！ 由紀ちゃん、天才っ！！」

さんざんはしゃぎまわった挙句、仕事から帰ってきた父に一番に報告していた。

その後のことは言うまでもなく。ただ、ほんとに父と母は似ているな……と実感した。

テンションについていけないわ……。

でも、そういうことが多々あったせいか二歳になって、たどたどしくも私が文章として言葉をしゃべりだしても二人は気味悪がず、むしろ「さすが私たちの子！」と喜んだ。

きっと、この二人だからだろうな。

二人が両親でよかったと思っただ瞬間だった。

まあ、ちよっとアレだが。

最近、周りがうるさくなった。

噂が噂をよんだのか、今では私は神童とよばれているらしい。

そうして今日もまた、それにつられた人が私を試すように質問していく。

「つたく。こっちは公園で遊んでいるんだよ。……一人でだけどこなにか？」

それなのに、こんな名前も知らない子連れの女性が「10+16は？」なんてふざけた問題をだしてくる。

教育ママとして対抗心でも抱いたのか、好奇心でなのか、どちら

にしてもいきなりとは失礼な大人だな。

「26」と無愛想に答えてやると、指も使わずあっさり答えたとに驚いているのか、こちらを信じられないような顔でみつめてくる。……ほんとに失礼なやつ。

この脳みその中にはもとから二十数年分の知識・情報があるんだ。積み重ねていかないと勉強したことが忘れていくとしても、まだ中学生の内容はわかる。

まあ、理科とかは怪しいけど。

たとえ忘れていたとしても、一度やったことだからはじめて勉強する者よりは身につく時間ははやいだろう。ある意味、予習してあるのと同じなのだから。(しかし高校生までの内容に限る)

ましては、足し算引き算など。ひらがななど。一般常識だ。

たしかめるように、何度も何度も問題をだしてくる。十桁・百桁の足し算、引き算。あげくのはてには掛け算、割り算まで。

あまりにもうざく、しつこいのでムカついた私は次々に遠慮なく答えてやると、女性はまた固まった。……おい、手をつないでいる子供が家に帰りたがっているぞ。

別にこの女性を待つ理由もないしな。時間の無駄だし。

私はその女性を無視して中断させられた遊びを続行する。

……うむ。砂遊びは面白い。久しぶりにやったが、はまるな。

「由紀ちゃん。そろそろ帰りましょーう」

もう、そんな時間か。

今回も邪魔されたしな。

ん？ そういえば、さっきの子連れの失礼な女性は……。

そうおもって、さきほどまで固まっていた人物がいたところを見ると、彼らはいなかった。

……最後まで、失礼なヤツ。

まあ、いいや。

さて、今夜の夕飯はなんだろうか？

次の日も、次の日も。

いまこの遊びが流行っているのか？ 暇人ども。

なんて思うくらい、大人たちが私へ質問してくる。

くだらない。

そう思いながらも、無視すればいいのにそれに答える私も……

くだらない。

私がやることひとつひとつに、大げさなくらい反応する大人たち。

っは。なんだそれ。ただいま、B級喜劇のコント上映中ってか。

そう思うくらい、彼らはあまりにも滑稽すぎた。

……すごいわ！ なんて頭のいい子なの！

そんなの当たり前。

……もうこんなにすらすらできるなんて！

だって、ズルしているのと同じだもの。

アア、 スベテ ガ クダラナイ。

毎日がつまらなくてすべて達観したような私は、しかしこの先自分の「今まで」の人生を捧げたいと思うほどの存在に出会うことになるとは、思いもよらなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4246z/>

転生女の独白

2011年12月15日00時50分発行